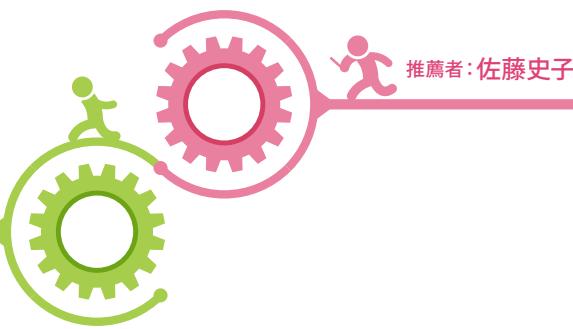




稻葉利江子

津田塾大学



推薦者：佐藤史子

ダイバーシティの視点を もっと多様に

前回コラムを担当された日本アイ・ビー・エムの佐藤さんよりバトンを受け取りました。佐藤さんのコラムを拝見して、私と同じ「物理分野の出身者」という共通点にちょっとした親近感を感じました。

私も元々は応用物理の分野で博士課程に進学し、光情報処理による顔認識の研究をしていました。その後、思いもよらぬご縁で、教育工学や社会情報学という異分野での研究に携わるようになりました。佐藤さんが感じられたように、私も自然科学の分野における研究と情報の研究とのギャップに悩みつつ今に至っています。

佐藤さんは、企業での女性技術者・研究者支援の取組みをご自身のご経験から書いてくださっていました。さらに、大学での研究者支援の取組みを知りたいという宿題をいただきました。

私が所属する津田塾大学では、2008年度に文部科学省科学技術振興調整費による委託事業として採択された「世代連携・理文融合による女性研究者支援」プログラムを推進するために、「女性研究者支援センター」が設置されました。その後、2016年度から6年間、電気通信大学を代表組織として、文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）の採択を受け、NTT先端技術総合研究所と本学の3機関で連携し取り組んできています。これらの事業では、「連携体制・ダイバーシティ研究環境整備」「女性研究者の採用・上位職登用・裾野拡大」「女性研究者の研究力向上のための支援体制の充実」を目標に、さまざまな仕組み作りをしてきました。文部科学省からの補助金交付が終了した今年度も継続されている取組みの1つとして、多くの大学でも導入がされはじめている「研究支援員配置プログラム」があります。ライフイベントにより研究活動の継続が困難だったり、十分な研究時間が確保できなかったりする研究者に対して、研究支援員の配置を支援し、研究活動をサポートするというものです。2017年度は2名、2018年度は5名、2019年度は4名が採択されています。現在、副センター長を拝命していることもあり、申請された先生方とお話しをする機会もあるのですが、「育児で十分な研究時間をとることができなく困っていたところ、研究支援員の制度を使う

ことで、関連研究の整理などやデータ分析の補助をしてもらえるというのは、本当に助かっている」というお話を聞き、このような活動の意義を改めて感じているところです。

とはいって、私自身は、「女性研究者支援」という取組みに対して違和感を感じている部分もあります。なぜ、「女性」だけ支援対象なのかということです。先の例のように、ライフイベントの影響を受けることが多いのが女性であるということも理解しています。ただ、私の周りの男性研究者たちも、子育てに参加し、送り迎えは「自分の役割」として時間を調整されている姿を目にはします。そういう意味では、「女性研究者への支援」も大切ですが、ライフイベントを「女性」だけのことではなく、「女性も男性も関係なく、家族で、コミュニティで考える」そういう社会になるべきなのではないかと強く思うのです。実は、先の「研究支援員配置プログラム」も本学の女性研究者だけが対象ではありません。制度を作る際に、委員会で十分に議論を行い「女性、男性関係なく」としました。残念ながら、応募者は女性のみでしたが……。

同じようなことを、社会人になりたてのときに、応用物理学会の男女共同参画委員会でも経験しました。「若手女性研究者の育成」ができないか……という議論があった際に、なぜ、若手女性だけなのか、これは逆に差別なのではないか……と、結局、議論の末、「若手研究者の育成」という形でプロジェクトを進めることになりました。

また、オリンピック・パラリンピックの影響でテレワークの導入が企業を中心に進んでいます。残念ながら「教育」の現場では在宅勤務は難しいですが、本学でも職員のテレワーク検討が始まりました。男性職員が、子ども誕生をきっかけに、在宅勤務を試行しています。また、男性職員の育児休暇取得者も出てきています。少しずつですが、ライフイベントに対しての考え方方が変わってきたのかもしれません。だからこそ、「女性研究者支援」ではなく、本来の意味での「ダイバーシティ推進」が重要なのではないかと思うのです。

ただし、「男性」と「女性」は、そして、それぞれの

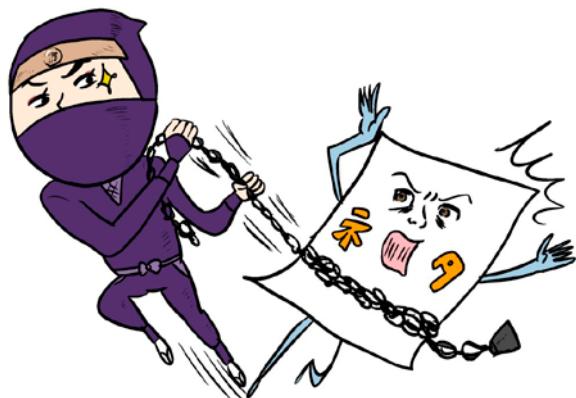
個人には個性があります。それをどう許容していくのかという視点も大切です。IT企業経営者のシェリル・サンドバーグ（Sheryl Sandberg）は、著者『LEAN IN』の中で、妊婦がなぜ車椅子マークの駐車場を使えないのか……と疑問に思い、すぐに変えさせたというエピソードを記しています。つい先日、日本の某企業のダイバーシティのワークショップで同様の意見が女性社員から出されたのを目にしました。その人の置かれている立場だからこそ

見えることもある、ということに対しては、気がついた人が発信していかなければ変えることはできません。それは、異なる立場からでは見えないことがあるからです。そういう意味で、ぜひ、性別や国籍などといったものを超え、フラットに話ができるコミュニティ作りが大切なのではないでしょうか。そのコミュニティが、本会の場で作られ、広がっていくと多くの人にとって生きやすい社会になるのではないかなと思います。



『特別解説』テーマ募集 !!

計算速度が1万倍に？仮想通貨が暴落するの？「特別解説」はそんな気になるニュースの学術的背景をタイムリーに分かりやすく解説し、好評をいただいている。読者の皆様からもテーマを募集しますので、情報処理の専門家に解説してほしいテーマをお寄せください。掲載は3カ月後くらいになりますので、ニュースは新鮮なうちに、思いついたらすぐお知らせください。



投稿先

情報処理学会 会誌編集部門 E-mail:editj@ipsj.or.jp